『文学界』（聚芳閣）細目稿

前田　貞昭

解題

『文学界』は1924年10月創刊、現時点で、第3巻第1号にあたる1926年1月号まで確認。年少の文学志望者を主たる読者対象とした投書・文芸雑誌である。発行元は東京市四谷区新宿1丁目51番地の聚芳閣（足立欽一社主）。編輯兼発行者は松本清太郎。第3巻第1号（1926年1月号）のみ、編輯兼発行者を狩野鐘太郎とする。

〈1925年版〉『文芸年鑑』（二松堂書店、1925年3月15日）所収「大正十三年の文壇」で、1924年を震災からの復興と共に各種文学雑誌が創刊された年として振り返る久木逸夫は、「二　文芸に関係ある雑誌」において『文学界』を「足立欽一、松本清太郎、勝承夫、高梨直郎の四名を編輯責任者として、其の一部を読者応募の原稿によるの目的で創刊した。」と紹介（4頁）。翌年の〈1926年版〉『文芸年鑑』（二松堂書店、1926年2月5日）も、「十一　文芸に関係ある新聞雑誌」（「大正十四年の文壇」の内）で「尚、投書雑誌として聚芳閣から出てゐる「文学界」、素人社の「現代文芸」等がある。」と言及する（145頁）。

投稿は、短篇小説・戯曲・小品（文）・小論壇・感想（文）・短歌・俳句・長詩〔『文学界』では、短歌・俳句等短詩形文学に対する概念として「長詩」を立てている〕などに分かってもっぱら「文叢」欄に掲載するが、ジャンル特性のため分量の多い戯曲・小説あるいは詩歌の優れたものは、依頼原稿と同様に扱って、目次に掲げるとともに本文欄に掲載し、さらには、口絵写真で優秀作投稿者を紹介するという方法で投稿意欲に応えている。なお、その他、文壇漫画、表紙絵、ゴシップなども懸賞募集対象としている。

既成作家や文壇大家からの寄稿は、聚芳閣社主足立欽一が徳田秋声門下の文学青年だった縁で徳田秋声、聚芳閣員の一人松本清太郎（『文学界』編輯兼発行者）が傾倒していたということで島崎藤村、あるいは、誌名を同じくする明治期の『文学界』旧同人の馬場孤蝶の寄稿が目につくが、雑誌全体としては、当時の新人・新進作家が際立っている。例えば、十一谷義三郎・佐々木味津三等の『文芸時代』同人や、中西伊之助・金子洋文・伊藤永之介等の文戦派、また、詩では投稿詩の選者も務めた福田正夫等の民衆詩派の登用等、新しい文学の動きを捉えて目配りのきいた編輯と評し得るが、新人発掘を謳った同誌の寄稿家の中心は聚芳閣社員を含む若い新進作家である上に、特別号を除いた通常号が4台64頁あるいは5台80頁を立て頁とすることもあって、社外寄稿家の力作・評判作を掲載するには至っていない。なお、劇作家でもあった社主の足立の好みと時代の反映であろうか、戯曲の掲載も少なくない。

発行元の聚芳閣については、『文学界』創刊間もない時期に、極めて好意的に扱った同時代の資料があるので引いておこう。『読売新聞』1924年10月12日発行第17088号第7面「読書界出版界」欄掲載無署名「盲人が杖無しで闇を歩くやうだ——併し文士揃で経営する聚芳閣はどんな方針で出版するか——」という記事である。次のような書き出しで始まる〔ルビは省いて、文末の句点を補い、明かな誤植は正した〕。

文芸書出版で近頃誰の目にも目立つすばらしい新興の活躍を痛快にやつてゐるものに聚芳閣（本年三月創立）がある。聚芳閣はまた主人足立欽一氏を始めその営業局の総員悉く新進の青年文士揃ひであるといふ点でも出版界近時の異彩として注目されねばならぬ。

▲高梨直郎氏　長篇小説『買はれた貞操』の著者。

▲宵島俊吉氏　新進詩人。既に数冊の詩集を出した。

▲井伏鱒二氏　ズウデルマンの長篇『父の罪』を訳した。

▲松本清太郎氏　長篇創作『情炎流転』執筆中。

こうした新人達が皆規定の執務時間には出版と販売の煩雑な事務を忠実にやつてゐる。而して主人足立氏——と云つてもここでは社長もなければ部下もない。原稿の取捨選択から広告販売一切のこと総て合議制のコンミユニズムでやつてゐるのだが——ともかくも其盟主とでも云ふべき足立氏に至つては押しも押されもせぬ徳田秋声氏直系の新進作家である。

〔中略〕

主として新人の力作のみを扱ふ聚芳閣の刊行が同業者間に驚異すべき能率を示したのは極めて最近の去九月のことである。此一箇月中の新刊だけが十余種にも達して居り創業以来約半歳に既に四十余種を刊行してゐる。

また同面には、「最近の雑誌界」として「三傾向——今年の夏から秋へ掛けての雑誌界に目星しい新傾向とでも云ひ得るものが三つあるやだ——」という記事がある。その三傾向とは、小見出に拠れば「（一）新人の跳躍する文芸雑誌の続出」、「（二）鬱勃たる科学雑誌の新しい芽生」、「（三）破天荒な懸賞募集で猛烈な競争」であるとし、その中で聚芳閣関係では、（一）の項で創刊された雑誌として『文学界』の名を挙げ、（二）の項で創刊予定として『趣味と科学』に言及している。この『読売新聞』で見る限り、震災復興景気の波に乗った新興出版社として成功し、注目を浴びていたようである。

聚芳閣は、1924年10月（実売は9月20日）から『文学界』を創刊、続いて、大判で写真頁の充実を誇る『趣味と科学』の11月創刊を計画し（この創刊予定については『読売新聞』1924年9月20日発行第17066第4面「よみうり抄」参照。実際には翌年1925年1月号を創刊号とする。『文学界』1924年12月号第1巻第3号巻頭色頁広告によれば『趣味と科学』正月創刊号発売予定は12月15日で、定価1円50銭、「口絵写真十数頁／本文挿入写真百五十余」とする）、さらに、1925年3月に『彼岸』（3月1日発行、2月24日印刷）、その半年後の1925年9月に『詩神』（9月1日発行、8月25日印刷）と矢継ぎ早に新雑誌を発行している。

しかし、『彼岸』は足立欽一を編輯兼発行者とした同人雑誌（同人は他に邦枝完二・近藤栄一・北小路功光）であり、『詩神』は奥附に編輯兼発行者を田中清一、編輯を詩神編輯所（福田正夫の住所

に同じ）と記すように、聚芳閣で編輯作業をしたようではなく、やがて発行所も聚芳閣の手を離れる。

すなわち、聚芳閣が出版事業主体として編輯・発行する商業雑誌は、『文学界』と『趣味と科学』の二誌であったということができる。『文学界』巻末には本文用紙とは別の浅黄の色用紙に「聚芳閣出版だより」、『趣味と科学』巻末には「聚芳閣月報」と称する自社出版物の広告頁を設けているのも、両誌を主力雑誌と位置づけていることの現われであろう。

この聚芳閣や『文学界』に注目するのは、当時二十代半ばだった井伏鱒二が初めて定職を得て勤務したのが聚芳閣であり、『文学界』に幾つかの作品を発表しているからである。聚芳閣勤務については、その勤務時期や職務内容についても、「雞肋集」以下の井伏自身の記述に錯綜・矛盾がないとは言えず、井伏自伝以外の資料によって、その井伏文の実否を確認してゆくことが必要であると思われる。

井伏の聚芳閣勤務開始時期について、従来は1924年11月とすることが多かったが、周辺事情の調査に基づけば、1924年9月中・下旬、敢えて限定すれば9月20日頃に勤務を開始したとするのが妥当であろう（拙稿「井伏鱒二の聚芳閣入社は大正13年11月か――井伏鱒二聚芳閣勤務時代の検証――」、兵庫教育大学言語表現学会『言語表現研究』第17号、2001年3月発行予定）。

井伏の最初の聚芳閣退社時期については、同僚だった勝承夫（宵島俊吉）の退社時期とも関係するのだが、それも含めて、『文学界』あるいは周辺資料から窺える聚芳閣の動勢を示しておこう。

○『文学界』投稿の選者として「毎号懸賞募集規定」末尾に聚芳閣内文学界編輯局の責任者（投稿の選者の意であろう）に、高梨直郎、宵島俊吉、松本清太郎、足立欽一の4名が揃って掲げられるのが、1925年2月号第2巻第2号迄である（未見の創刊号、特別号の1925年1月号第2巻第1号を除く。なお、これ以後、懸賞募集規定と選者を併せて掲載する例もない）。次号1925年3月号第2巻第3号から、それまで宵島が担当していた「長詩」の選に福田正夫があたるようにかわる。

○『文学界』1925年2月号第2巻第2号には、勝承夫・岡田伊三郎・松本清太郎に拠る「四篇を三人で読む」を掲載しているが、これ以後、宵島俊吉の筆名も勝承夫の本名も、確認し得た『文学界』には見えない。

○『文学界』1925年3月号第2巻第3号から「編輯室から」という編輯後記に該当する欄が新たに設けられ、初回は狩野鐘太郎が執筆している。これ以前には第2巻第1号に「編輯後記」という一般的名称で掲載されたものがあるだけで、その他の号には欄そのものがなかった。この第2巻第3号における「編輯室から」欄の新設には、前号までのスタイルに些少でも変更を加える意志が認められる。但し、署名があるのはこの号だけで、1925年4月号第2巻第4号以後「編輯室から」は無署名である。なお、1925年1月号第2巻第1号の奥附上欄掲載年賀広告に「聚芳閣員」として足立以下10名の名前があるが、そこには狩野の名前はなく、この1925年3月号第2巻第3号編輯段階あたりで聚芳閣に入社したものと推定される。

○『趣味と科学』1925年4月号第1巻第4号（1925年4月1日発行、3月25日印刷納本）の「編輯後記」冒頭は「三月号は編輯者が変つたために、いろ〳〵編輯上の手落ちがあつたり、発行日がをくれたりしまして」と、担当編輯者が2月号迄と3月号以降とでは交代し、支障が生じたことを記している。

○〈1926年版〉『文芸年鑑』の「文士録」に拠れば、1925年2月に川添利基が入社している。

このように挙げてくると、『文学界』『趣味と科学』両誌1925年3月号編輯時期（1925年2月頃）に、聚芳閣社内で何らかの人事異動があったと推定してよいだろう。

当時の習慣に倣って第1面を出版広告で埋める『読売新聞』に限って言えば、1925年1月、2月には皆無だった聚芳閣出版物の広告が、3月30日発行第17256号掲載の『趣味と科学』4月号春季増大映画号広告を皮切りに、4月1日発行第17258号に『文学界』4月号広告、4月11日発行第17268号に『天竺物語』（足立欽一著）広告、4月12日発行第17269号に『叛逆』（徳田秋声）『流るゝまゝに』（山田順子）『闇に咲く』（十菱愛彦）の横1段を占める近刊書広告と続く。他方、出版企画の面では1925年に入ると、三島才二（霜川）を編纂校訂者とする「日本名著大系」「日本戯曲名作大系」（内容見本は、国会図書館蔵『趣味と科学』大正15年2月号の綴込みを確認。3月末予約締切）の計画を発表するなど積極策が目につく。

しかし、井伏は「完結しない月なみな生活」（『文芸通信』1934年1月）で「社の経済は加速度的に悪くなつてゐた。この状態を立てなほすために、社長は十一谷義三郎氏を顧問に迎へた。」と言っている。十一谷は、自筆年譜の1925年の項で「友人足立欽一氏経営の出版書肆聚芳閣の客員となる。聖書辞典の複刻、異国叢書の刊行等、多少読書界に貢献し得たりと信ず。」（『現代日本文学全集』第61巻〈新興芸術派文学集〉、改造社、1931年4月15日、172頁）と言い、『文芸時報』1926年1月5日発行第4号第6面「文壇消息」は「▲十一谷義三郎氏　聚芳閣出版部に入社」と伝える。

聚芳閣の出版事業としての終着点も定かにしていない。現時点で確認できているのは、聚芳閣出版物が1924年から1927年までの間に刊行されていること、『文芸時報』1927年6月23日発行第40号第5面に聚芳閣と菊池寛との間で訴訟沙汰となった件の続報がある程度にとどまる。

〈1926年版〉『文芸年鑑』の「文士録」などから『文学界』関係者の消息を引いておこう。

『文学界』編輯兼発行者であった松本清太郎は、「商業に失敗し、その後二年間出版書肆員たりしが十月限浪人す。」とあり、1925年10月に聚芳閣を退社したと推定される。そして、その一年半後、『文芸時報』1927年4月28日発行第36号第6面掲載「文芸消息」は、松本について「現代文芸五月号より専らその編輯に当り同誌の面目を一新すると」と記している。すなわち、退社一年半後に、『文学界』出発期の編輯兼発行者は、かつてのライバル誌に移ったということである。現在確認できる最終号である1926年1月号第3巻第1号迄短歌の選者を務めている高梨直郎（聚芳閣社主足立欽一の妹婿、本名足立直太郎）は、前年の「文士録」には「新聞、雑誌等の記者を為し又書肆『裳文閣』を経営せしも失敗し、現在は聚芳閣社員たり」と書き込んでいたのだが、〈1926年版〉では「記するほどの主な経歴なし、雑誌記者及報知新聞の記者たりし事あり」とするのみで、「聚芳閣」の名前が削られている。狩野鐘太郎は「今日では聚芳閣編輯部に居ります」と書く。川添利基は、「十四年二月から聚芳閣編輯部へ入つたが目下は休養中」とする。

なお、井伏との関連では、早稲田大学の同窓生であった、小島徳弥、川添利基、坪田譲治、武藤直治等の名前が『文学界』誌上にあることを注記しておきたい。

現物未確認の号については、他の雑誌に掲載された広告から引用することで、該当号の細目に代え

た。そのほか、『早稲田文学』1925年11月1日発行第238号の大槻憲二「十月の評論」に「「文学界」の「人生記録としての小説」(武藤直治氏)」が取り上げられているので、1925年10月号が刊行されたことも確かめられる。

国立国会図書館には第1巻第2号～第2巻第7号(1924年11月～1925年7月。請求番号雑8-199)、日本近代文学館には第1巻第3号、第2巻第3号・第6号、第3巻第1号を所蔵している。本稿作成にあたっては、両館架蔵の『文学界』を利用させて頂いた。また、周辺事情調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、大阪府立中央図書館、兵庫教育大学附属図書館の情報サービス係のお世話になった。記して感謝する。

凡例

1. 原則として本文に附された標題・執筆者を掲出したが、投稿選評などで目次標題の方が分かりやすいと判断したものは、目次から採った。その場合は、注にその旨を記した。
2. 欄名などで本文・目次にあるものは【 】で示し、無署名記事は特に混乱を起こさないと思われるところでは、筆者名を空白のままとした。
3. 編者の注記は〔 〕に入れた。また、本文に附されていなくても、目次標題に( )で括ってジャンルなどを表示している場合はそのまま採用した。
4. 「文叢」欄掲載投稿原稿については、主として目次に掲出されているものを掲げたが、繁簡錯雑として必ずしも整序に至っていないことを断わっておく。

第1巻第1号10月創刊号

1924(大正13)年10月1日発行(9月15日印刷納本)〔左記は推定〕
定価25銭
編輯兼発行者:未確認

□沼(小品)	成瀬無極
怒り上戸(小説)	加宮貴一
おくまの姙娠(小説、推選)	吉田甲四郎
新進作家論(その一)	林　政雄
私と田山先生	小島徳弥
□ありわびて(短歌)	高梨直郎
□風の中の雞、他三篇(長詩)	近藤栄一
旅の印象	文壇三十七家
△T君の話	下村千秋
△灯籠流し(小品)	倉田　潮
自家広告	新井紀一
「赤・黒・白」の飜訳について	神山宗勲
◆文壇ゴシツプ	XYZ
超(起カ)て若人等よ	川添利基
■(読カ)んだ小説に就いて	足立欽一
【文叢】	
□ゾラの死後(小説)	一木十吉

感想
長詩
短歌
俳句
懸賞作品募集規定
新進偉(作カ)家の俤——その他（口絵写真版二頁）

備考：現物未確認。『DAMDAM』〔ダムダム〕創刊号（1924年10月10日発行、1924年10月7日印刷。編輯人林政雄）巻末広告（135頁。対向の134頁には『文芸時代』創刊号広告を掲載）に拠る。同広告には「月刊文芸雑誌」、「創刊号出づ（十月号九月廿日発行）」とあるが、この発行日は事実上の発売日と解せられる。『早稲田文学』1924年9月1日発行（8月25日印刷）第223号「時事消息」の創刊雑誌に「●文学界　聚芳閣より九月創刊」、また、『読売新聞』1924年9月21日発行第17067号第4面「よみうり抄」に「▲「文学界」創刊号　昨日聚芳閣から発売された」とある。

第1巻第2号11月号

1924（大正13）年11月1日発行（10月22日[注1]印刷納本）
定価25銭
編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：田中常太郎（三誠社）
表紙画：辻音楽者（表紙入選）長谷川忠勝

【口絵写真】
九月二十七日　銀座キタニホン楼上高梨直郎氏著『買はれた貞操』出版紀念の会[注2]
『童子照磨』の著者北小路功光氏と夫人

カアペンタの文明観（評論）	宇佐美文蔵	2- 8
猿（小品）	北小路功光	9-11
秋茄子（小説）	佐々木味津三	12-16
電車内の喜劇（小説）	斎藤　皖	17
野火（戯曲、一幕物）	深水　龍	18-23
新しい詩人の道	宵島俊吉	24-25
憂愁三題噺（随筆）	正岡　蓉	26-27
文章世界時代投書家の今昔	加藤由蔵	28-30
痴情描写とローレンス	小島徳弥	30-31
渇愛と慈悲との闘争——天竺物語を読む——	江部鴨村	32-33
【詩歌】		
レギーネを愛す	井伏鱒二	34
五人集[注3]	遠藤作得茂 宮本狄猴生 北沢喜代治 遠山並夫 山本敏樹	35
関西の文芸界	南谷　注	36
新進四作家の近業	松本清太郎	37-39
「買はれた貞操」の会	一記者	40-42
ゴシツプ	ＸＹＺ	43
明らかを欲す	岩瀬直彦	44
【文叢】		
要治（小説）	早乙女歌津	45-50
応募小説読後感[注4]	足立欽一	51

感想　52-54
長詩　55-59
　長詩選後小感[注5]　宵島俊吉　59
短歌　60-62
　選後に――描写と説明とについて――　高梨直郎　63
俳句　64
誌友通信　65
毎号懸賞募集規定[注6]　66

注1、奥附は10月15日印刷、表4は10月22日印刷納本と表示。国立国会図書館蔵当該号表1は製本のため確認不可。ここでは最も遅い日付に従う。
注2、出席者には、井伏鱒二、宵島俊吉（勝承夫）の名前がある。
注3、目次には「詠草」とある。本文末尾に「投稿歌のうちから以上の五君を推選して本欄へ紹介することにしました（選者）」とある。
注4、本文には「読後感」とある。標題は目次に拠る。
注5、本文には「選後小感」とある。標題は目次に拠る。
注6、目次には「各種作品投稿規定」とある。募集原稿の締切は「前々月25日」、末尾に「編輯局厳選／責任者／高梨直郎／宵島俊吉／松本清太郎／足立欽一」とある。

第1巻第3号12月号

1924（大正13）年12月1日発行（11月24日印刷納本）
定価25銭
編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：田中常太郎（三誠社）
表紙画：（入選）島本多加治

【口絵写真】
徳田秋声氏と足立欽一氏（徳田氏令息一穂氏撮影）
三詩人近影〔井上康文氏、橋田東声氏、福田正夫氏の家庭〕

古い新しい　徳田秋声　2- 3
トランプ（小説）　倉田一郎　4- 9
とうもろこし（小説）　入江貞三郎　10-13
塹壕（戯曲、一幕）　狩野鐘太郎　14-16
文壇疑義　文好青二才　17
表現主義の健全性について　秋田雨雀　18-19
ゴオルキーの隠れたれる一面[注1]　下村千秋　20-21
観会のあと（詩）　白木睦郎　21
学者としての鴎外先生　鈴木春浦　22-24
八人集（短歌、推薦歌）　25
官服（散文詩）　井上康文　26-27
蓉峰氏からきいた話（随筆）　足立欽一[注2]　28-29
露原（短歌）　印田巨鳥　30
日暮前溯来にて（短歌）　橋田東声　30-31
九月の雨（短歌）　下田晩鳥　31
馬琴翁の苦心　〔無署名〕　32-33
『童子照磨』に就いての雑感　北小路功光　34-35
大森雑記　近藤栄一　36-37
『買はれた貞操』を読む　中西伊之助　38-40
抒情小説作家としての高梨直郎氏の処女作品　福田正夫　40-41

ゴシツプ三章　42
鞭一つ　小島徳弥
重ねて鞭打たん　ＸＹＺ
寛没落　〔無署名〕
洋文をおごらせる法　〔無署名〕
【文叢】
闇（短篇小説）[注3]　草野　緑　43-48
読後感　欽一　49
小品　50-52
長詩　53-57
選後に　宵島　57
小論壇　58-60
短歌　61-63
俳句　64
俳句の選後　欽一　65
短歌選後感　直郎　65
読者通信[注4]　66-67
毎号懸賞募集規定[注5]　68

備考：目次には12月号とあるべきところが、11月号と誤植されている。
注1、目次には「ゴオリキイ」とある。
注2、本文末尾には「(欽一述　M筆記)」、目次には「足立欽一」とある。
注3、目次には「小説」とある。
注4、目次には「誌友通信」とある。
注5、末尾に「編輯局厳選／責任者／高梨直郎／宵島俊吉／松本清太郎／足立欽一」とある。

第2巻第1号1月新年特別増大号[注1]

1925（大正14）年1月1日発行（12月15日[注2]印刷納本）
定価70[注3]銭
編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：田中常太郎（三誠社）
表紙図按：神山宗勲

【創作戯曲十六篇】
退屈時代　十一谷義三郎　2- 13
妹の癇癪　北小路功光　14- 23
乞食　佐々木味津三　24- 27
指　高梨直郎　28- 35
兄弟よ許せ　新井紀一　36- 44
白い眼　倉田　潮　45- 53
氷つた部屋　下村千秋　54- 63
都腰巻　諏訪三郎　64- 70
うちあはせ　井伏鱒二　71- 77
死刑執行人　中西伊之助　78- 86
山本二郎（一幕）　近藤栄一　87- 97
挿話（写真館）　正岡　蓉　98-104
馬鹿の兄公　十菱愛彦　105-113
雪もよひ　南　幸夫　114-121
お豊　松本清太郎　122-129

長篇の断片　足立欽一　130-140
文壇疑義　春野　緑[注4]　141
【詩と短歌】
雪の田野に　白鳥省吾　142-142
雪や時雨　佐藤惣之助　144-145
近詠　窪田空穂　146-147
冬の雨　木下利玄　148-149
霜夜[注5]　高梨直郎　149
辛夷の実　山田邦子　150-151
季節の花　前田夕暮　152-153
劇場の表裏　邦枝完二　154-157
戯曲の独立　川添利基　158-159
原始舞踊の姿　永田龍雄　160-166
十三年度に於て私の注目したる新進作家
十四年度文壇に対する希望若しくば[ママ]予想　（文壇三十七家）167-172
中村吉蔵　徳田秋声　大泉黒石　若山牧水　鈴木善太郎　小川未明　島田青峰　井上康文　諏訪三郎　鷹野つぎ　中西伊之助　佐々木味津三　永田龍雄　川端康成　戸川貞雄　日夏耿之介　橋田東声　秋田雨雀　前田河広一郎　小島徳弥　福田正夫　須藤鐘一　近藤栄一　石浜金作　白鳥省吾　新井紀一　正岡蓉　内藤辰雄　細田民樹　佐藤惣之助　中村武羅夫　土田杏村　米沢順子　南部修太郎　下村千秋　加宮貴一　中河与一
新進五人集[注6]　輝枝子等　173
【十三年度文壇総評】
十三年度歌壇を顧みて　橋田東声　174-180
一九二四年度・詩壇概観　福田正夫　180-185
文壇回顧一年　小島徳弥　185-191
応募作品に就いて　191
推薦詩　三篇　白樺潤之助等　192-193
編輯後記[注7]　194
附録（現代日本文士録）　三百数十氏　別頁1-16

注1、表1に「新年特別増大号」とある。
注2、奥附下欄にある「本号特価金八拾銭」という印刷文字の内「八」を、ゴム印で「七」と訂正。
注3、奥附は12月10日印刷、表1は12月10日印刷納本、表4は12月15日印刷納本と表示。ここでは最も遅い日付に従う。なお、前号第1巻第3号表4には「新年増大号　十二月二十日発売　特価60銭」とする全頁広告がある。
注4、本文には「春野薫」とあるが、目次には「春野緑」また、第1巻第3号も「春野緑」とあるので、本文は誤植と見て訂正した。
注5、目次には掲出されていない。
注6、目次には「推薦歌　五人集」とある。
注7、「本号へ創作を寄せられる筈の加宮貴一氏及び金子洋文氏岡田伊三郎氏の原稿は、遂に締切十一月二十日までの間に合ひませんでした。」とある。また、「編輯後記」下に「賀正」として以下の「聚芳閣員」を掲げる。「足立欽一／高梨直郎／松崎辰男／大野元造／松本清太郎／宵島俊吉／井伏鱒二／岡田伊三郎／斎藤晥／富樫祐吉」

第2巻第2号2月号

1925（大正14）年2月1日（1月25日印刷納本[注1]）
定価30銭

編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：岩本菊雄（新栄印刷株式会社）

【口絵写真】

新進の三氏〔中西伊之助氏の近影、論壇に擡頭せんとする橋爪健氏、婦人公論を退き創作三味に入る諏訪三郎氏〕

本誌によつて推薦されたる若き人々

新しい詩と小説——新感覚派の小説と現代詩——	井上康文	2- 4
痩せ男（戯曲、一幕）	福田正夫	5-11
虚栄の死（戯曲、壱幕）	足立欽一	12-23
十六篇の創作態度[注2]		
新年号の四創作	橋爪　健	24-25
中西伊之助氏の「死刑執行人」を機縁として	林　政雄	26-28
川端君に代つて	林　政雄	28-30
四篇を三人で読む	勝　承夫 岡田伊三郎 松本清太郎	30-31
悶絶（詩）	目次ひさ子	32
水上の悪夢（詩、他一篇）	西谷勢之介	32
病想（詩）	岡村二一	32-33
健康に喜悦する鳥崎藤村氏を訪ねて	一記者	34-35
大森雑記	近藤栄一	36-38
子に捧ぐ（短歌）	増川順子	39
新進九人集（短歌）	村松順平等	40
文士の楽書（漫画）	細井英子	41
井戸は去る（小説）	岡下一郎	42-45
噂（小説、推薦）	佐藤寅雄	46-52
庭前小景（短歌）	畑喜代司	53
春愁（短歌）	山本敏樹	53
文壇京都大学論	尾関岩二	54-55
同人雑誌の回顧	能　幸吉	56
【文叢】		
小論壇	中野駿太郎他十四篇	58-63
小品	山崎純生他十一篇	64-68
長詩	塚原嘉重他二十四篇	69-74
短歌	吉田緑郎他百三十八首	75-78
選後小感	高梨直郎	78
俳句	佐藤淳一郎他百二十六句	79-80
誌友通信		81-83
毎号懸賞募集規定[注3]		80

注1、奥附は2（ママ）月23日印刷、表1、4は1月25日印刷納本と表示。ここでは最も遅い日付に従う。

注2、目次には「批評と感想」とある。

注3、目次には「投稿清規」とある。末尾に「編輯局厳選／責任者／高梨直郎／宵島俊吉／松本清太郎／足立欽一」とある。

第2巻第3号3月号

1925（大正14）年3月1日発行（2月25日印刷納本）
定価30銭
編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：谷口熊之助（八紘社）

【口絵】

島崎藤村氏と令息の近影
推薦されたる若き人々（小西敏郎、山崎純生、早乙女歌津夫、高杉一男）

積極的リアリズムに就て	武藤直治	2- 4
無知ならずか	洋文	4
塀外の一場面（戯曲、一幕）	邦枝完二	5- 9
浅草交響楽（小説、第一部）	正岡莞	10-18
寂心抄（短歌）	北小路功光	19
詩歌に歌はれた労農ロシア	本郷一郎	20-27
『ノンキナトウサン』脚色について ——質ねられたが幸ひ自分の考へをかく——	金子洋文	28-29
島崎藤村論（一）——藤村氏とその作品について——	松本清太郎	30-32
裾野〔俳句〕	中村星湖	33
山村暮鳥君の死	秋山　登	34-35
主に感心したもの	伊藤永之介	36-38
ゴシツプ　久保万怪我人先生		38
郊外に住む（詩）	村井武生	39
大森雑記	近藤栄一	40-43
紫羅傘の記	ＸＹＺ生	44-45
二葉亭四迷の断面	加治文三	46
もの申す	高梨直郎	47
シンクレアの作品——労働文学の初陣——	神山宗勲	48-49
恋愛と死	宇佐見文蔵	50-51
文壇闘争史——明治大正文壇合戦ばなし——	林　政雄	52-53
桜草（詩）	白木睦郎	53
『バグタッド』の盗賊になつた上山草人の昔語	岩淵甚四郎	54-56
二月号作品読破	狩野鐘太郎	57-58
歌舞伎劇朗読興行の初め	坂本猿冠者	59
『文芸春秋』合邦ヶ辻	道陸山人	60-61
蒼白い感傷（詩）	高梨直郎	62-63
「文章世界」時代[注1]——投書家の今昔——	加藤由蔵	64-65
集つた小説を読んで	松本清太郎	66

【文叢】

短篇小説・戯曲・他・懸賞募集規定		67
小論壇〔編輯局選〕		68-70
小品文〔松本清太郎選〕		71-72
長詩〔福田正夫選〕		73-75
短歌〔高梨直郎選〕		76-77
俳句〔足立欽一選〕		78
誌友通信		79
編輯室から	狩野[注2]	80

備考：目次には「夕刊（小説）　木内高音」が掲出されているが、本文にその作品は掲載されていない。そのためか、目次掲出のノンブルと本文のノンブルとの間には一致しないところがある。
注1、目次には「文章世界時代の投書家の今昔物語」とある。

注2、本号以前、この「編輯室から」という欄に類似するものとしては第2巻第1号に「編輯後記」があるのみ。本号以後「編輯室から」欄は編輯後記に相当するものとして継続される。なお、「狩野」の署名が末尾にあるが、以後、実見できたものはいずれも無署名。

第2巻第4号4月号

1925（大正14）年4月1日発行（3月25日印刷納本）
定価30銭
編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：植田庄助（常磐印刷株式会社）
表紙画：東坊城光長

【口絵写真】
斎藤茂吉氏帰朝歓迎の会（海上ビルデング中央亭にて）
推薦された人々（菅野千介、川西長造、上松祥子）

通俗小説一転化の傾向	馬場孤蝶	2- 5
【創作】		
都腰巻（小説）	綿貫六助	6- 8
富本の場合（小説）	松本清太郎	9-13
吉田松陰（戯曲、二幕）	狩野鐘太郎	14-19
女と影（推薦小説）	杉守よしえ	20-22
検尿試験管（詩）	多田文三	23
エツセ・ア・ラ・モオド	加宮貴一	24-27
素描・林檎・言葉	十一谷義三郎	28-29
『雪』の価値を論ず	吉田甲子太郎	30-33
気紛れの記	足立欽一	34-35
取りとめのない事	新井紀一	36-38
モデル問題と作者の責任	倉田　潮	39-40
ゴシツプ壇	鳴海四郎	40
新人『作と人との』印象[注1]	ＸＹ	41
春の横顔（詩）	深尾須磨子	42-43
木下利玄君を憶ふ	橋田東声	44-47
茂吉氏帰朝歓迎会	永田龍男	48-49
短歌五首――斎藤茂吉氏の謎――		49
海外文芸無駄話	仲郷三郎	50-51
新劇万才!!!――於邦楽座沢正初日――	十菱愛彦	52-53
『文芸春秋』合邦ケ辻	道陸山人	54-55
三月号作品読後――新潮演劇新潮文芸春秋の諸作――	岡田伊三郎	56-57
新刊書雑誌紹介――寄贈されたもの――		58
探してゐるもの		59
応募作品選外佳作一覧		60
【文叢】		
短篇小説・戯曲・長詩・論文・其他募集規定		61
文壇漫画	野竿哲夫	62
小論壇		63-65
小品〔編輯局選〕		66-68
感想文〔編輯局選〕		69-70
長詩〔福田正夫選〕		71-73
短歌〔高梨直郎選〕		74-76
選後言	高梨生	76
俳句〔足立欽一選〕		77

誌友通信　78-79
編輯室から[注2]　80

注1、目次には「新人「作」と人の印象」とある。
注2、「本誌も本月号から部数を倍にしました。」また、「本月号に林政雄氏の「文壇闘争史」及松本清太郎氏の「島崎藤村論」の発表し得なかつたことを残念に思ひ、同時に諸氏におわびします。」とある。

第2巻第5号5月号

1925（大正14）年5月1日発行（4月25日印刷納本）
定価30銭
編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：植田庄助（常磐印刷株式会社）
表紙画：東坊城光長

【口絵写真】
足立欽一作「天竺物語」第二幕摩迦陀国王城の舞踏場
推薦されたる人々（片山弥、長谷川清、尾坂静山）
旧『文学界』のこと　島崎藤村　2- 6
【創作】
地獄へ行く使者（戯曲）　川添利基　7-12
笑ひの後（小説）　坪田譲治　13-17
嫉妬（戯曲、対話劇、壱幕）　足立欽一　18-25
女外交員（推薦小説）　長谷川清　26-29
日本の現代小説と婦人問題　宮島新三郎　30-34
小説の材料（尾崎紅葉氏の作品）　35
フランドルに咲いた赤い花 ブロードコーレンズ　本郷一郎　36-38
島崎藤村論（承前）——氏の最近と永遠の希望——　松本清太郎　39-40
新人『作と人との』印象　X・Y　41
『処女の門』発売禁止に就て　十菱愛彦　42-43
万葉集抄釈　橋田東声　44-47
現代文士の投書家時代　龍野流人　48-49
海外文芸無駄話　仲郷三郎　50-51
北小路功光氏の芸術を評す　大窪　径　52
同人雑誌駄々　53
ゴシツプ　鳴海四郎　53
『文芸春秋』合邦ケ辻　道陸山人　54-55
特別評論・論文募集規定　55
新刊紹介——寄贈されたもの——　56
探してゐるもの　57
大森雑記　近藤栄一　58-60
詩八篇（夢羅木・泉・大野・棟木・三住・鈴木・斎藤・平野）　61-63
詩選評[注1]　福田正夫　64
応募小説選後[注2]　岡田伊三郎　64
【文叢】
短篇小説・戯曲・他・募集規定　65
小論壇〔編輯局選〕
宣伝文学に対する要求　片山　弥　66-68
小品〔編輯局選〕

語らぬ女（小品）　尾坂静山　69-71
長詩〔福田正夫選〕　72-73
短歌〔高梨直郎選〕　74-76
俳句〔足立欽一選〕　77
選後に　足立欽一　77
誌友通信　78-79
編輯室から[注3]　80

注1、本文には「選評」とある。標題は目次に拠る。
注2、本文には「応募小説選後」とあって無署名だが、目次に「小説選評　岡田伊三郎」とあるのに拠る。
注3、「応募戯曲は非常に多く集りました。本号に発表すべきを、選者足立氏の都合により次号になりましたから不悪御承知下さい。／次号には詳細に選評を添えて発表します。」とある。

第2巻第6号6月号

1925（大正14）年6月1日発行（5月25日印刷納本）
定価30銭
編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：野口常太郎（友文社）
表紙画：東坊城光長

【口絵写真】
二詩人の近影（右福田政雄氏左高梨直郎氏　筑波山にて）
推薦された人々（鳴海四郎、伊藤哀三、田原吾朗、大沢要）
万葉調　橋田東声　2- 3
【創作五篇】
踏切と影（小説）　新井紀一　4- 6
鯉（小説）　加藤由蔵　7-10
親切（小説）　豊永寿人　11-14
春の踊り（推薦小説）　大沢　要　15-17
歪める哄笑[注1]（推薦戯曲）　鳴海四郎　18-22
短篇小説に就いて　伊藤永之介　23-24
或る日の断想――散文詩――　井上康文　25-26
新しき明日への展開　岩永　胖　27-28
犀星氏の詩とその風格について　村井武生　29-31
新しい女流作家――『流るるままに』を読む――　尾関岩二　32-33
長篇小説作法――紅葉氏の言葉――　34
久闊（短歌）　今中楓渓　35
私の手記　足立欽一　36-38
自著歌集『傷める花』について　高梨直郎　39
文壇漫画　伊藤哀三　40
文壇いろは与太辞典（一）　龍野流人　41-42
探してゐるもの　43
新刊書雑誌紹介――寄贈されたもの――　44
戯曲選後に　足立欽一　45
応募小説を読んで　松本清太郎　46
【文叢】
短篇小説・戯曲・他懸賞募集規定　47
小論壇〔編輯局選〕　48-54

新感覚主義に就いて　鴨飛田生　48
文芸雑感　伊藤理三　49
春（小品）　田原吾朗　50
突風（小品）　高橋　郁　51
長詩〔福田正夫選〕　55-57
朝の幸福（詩）　森　正雄　55
長詩選評　福田正夫　57
短歌〔高梨直郎選〕　58-60
選後小言[注2]　高梨直郎　60
俳句〔足立欽一選〕　61
誌友通信　62-63
編輯室から　64

備考：目次には「ゴシツプ――四郎――」を掲出するが、本文に該当する記事はない。
注1、目次には「歪める笑」とある。
注2、目次には「短歌小言」とある。

第2巻第7号7月号

1925（大正14）年7月1日発行（6月25日印刷）
定価30銭
編輯兼発行者：松本清太郎
印刷者：野口常太郎（友文社）
表紙画：東坊城光長

【口絵写真】

徳田秋声氏『籠の小鳥』出版紀念会（五月二十九日夜小石川偕楽園にて）
推薦された人々（仲茂一、佐後淳一郎、夢羅木竹夫、川澄純一）

【創作五篇】

恋人の人形[注1]　武藤直治　2
山鳩　松戸侃治　6-11
飾窓に住む人　尾関岩二　12-15
海二図　深水　龍　16-20
ゴシツプ　20[注2]
由良川端より（推薦）　霜尾延孝　21-23
新進詩人十八家論　田辺耕一郎　24-26
ゴシツプ　26[注3]
「傷める花」雑感　角田　恒　27-28
夏と女性との印象[注4]　29-32
上泉秀信　邦枝完二　津村京村　佐藤惣之助　江馬修　永田龍雄　福田正夫
小島徳弥　小島健三　加藤武雄　斎藤龍太郎　倉田潮　池田孝次郎　市川又彦
橋田東声　青野季吉　新井紀一　小牧近江　恩地孝四郎　北小路功光　江部鴨
村　佐々木味津三　生田蝶介

【詩と短歌】

淑やかな恍惚〔詩〕　神谷暢二　33
草と心霊（こころ）〔詩〕　神谷暢二　33
早春〔詩〕　鈴木真嗣郎　34
四月の海〔詩〕　平野威馬雄　34
ある放心〔詩〕　平野威馬雄　34
ある風景〔詩〕　平野威馬雄　34

休日〔詩〕	石原　亮	34
歩道〔詩〕	石原　亮	34
窓〔詩〕	石原　亮	34
山城宇治〔短歌〕	日比野道男	35
樹影集〔短歌〕	相良義重	36
梅雨〔短歌〕	上松輝子	37
山の冷気〔短歌〕	高梨直郎	38
『文学界』一週年紀念号原稿募集規定[注5]		39
須藤鐘一君の為に弁ず	足立生[注6]	40
【ゴシツプ】「祇園島原」定量分析批評	井伏生[注7]	40
文壇いろは与太辞典（二）	龍野流人	41
【ゴシツプ】		41
叙事詩『青春の地へ』に就いて	白鳥省吾	42
探してゐるもの		43
新刊書雑誌紹介――寄贈されたもの――		44
詩選後[注8]	福田正夫	45
短歌小感[注9]	高梨直郎	45
集まつた小説	松本清太郎	46
戯曲の選後に	川添利基	46
【文叢】		
短篇小説・戯曲・他・懸賞募集規定		47
小論壇〔編輯局選〕		48
小品文〔松本清太郎選〕		49-53
文学界読者の会について	山西敏郎	53
感想〔川添利基選〕		54
長詩〔福田正夫選〕		55-57
五月の鐘	榎並きよし	55
短歌〔高梨直郎選〕		58-60
俳句〔岡田秋雨選〕		61
誌友通信		62-63
文学界読者の会（大阪）		63
編輯室から		64

注1、目次には「恋人と人形」とある。
注2、「創作五篇」中の頁にあるが、余白に置かれたコラム。
注3、余白に置かれたコラム。
注4、目次には「夏と女性の感想」とある。
注5、選者を以下のように紹介。「短篇小説　徳田秋声氏選、戯曲　邦枝完二氏選、長詩　福田正夫氏選、短歌　高梨直郎氏選」。また、「編輯室から」でも「本欄に紹介した通り、この十月号を以て本誌一周年になりますので、倍大号を出します」と企画を紹介している。
注6、目次には「欽一生」とある。
注7、目次には掲出されていない。
注8、本文には「選後に」とある。標題は目次に拠る。
注9、本文には「選後小感」とある。標題は目次に拠る。

第2巻第9号9月号

1925（大正14）年9月1日発行〔左記は推定〕
定価30銭

後期印象派文芸	土田杏村
労農思想家の文芸観	武藤直治
ウイリアム・モリスの詩の特質	白鳥省吾
裸の劇場	川添利基
緑蔭の書卓より	高梨直郎
●『市場・工場』を読む	高山　巌
●『傷める花』を読む	山西敏郎
【創作五篇】	
強い母（小説）	伊藤永之介
山で死んだ男（小説）	大坪草二都
麦刈り（小説）	原　丈
葡萄一房（小説）	伊藤信吉
魂の入替（戯曲）	狩野鐘太郎
梅雨前後（短歌）	松尾ぬまを
風味の豊かな外の夜景（詩）	夢羅木竹夫
洋室（詩）	村井武生
旧い春（詩）	英　美子
黒苺（詩）	本田きぬ子
◇同人雑誌紹介評	
◇一週年紀念特別号予告	
◇文学界一週年紀念読者大会記	
選評	福田正夫 松本清太郎 川添利基 高梨直郎

備考：現物未確認。詩神編輯所編『詩神』第1巻第1号1925年9月号（聚芳閣発行、1925年9月1日発行、8月25日印刷）掲載巻末広告に拠る。『読売新聞』1925年8月16日発行第17395号第4面「よみうり抄」に「▲「文学界」9月号　諸家の「社会と文芸との交渉」をのせる」とある。

第3巻第1号1月新年新進作家号[注1]

1926（大正15）年1月1日発行（1925年12月25日印刷納本）
定価30銭
編輯兼発行者：狩野鐘太郎
印刷者：野口常太郎（友文社）
表紙画：東坊城光長

【新進作家創作】

不幸な姉（小説）	加藤由蔵	2- 6
二羽の鶏雛（小説）	武藤直治	7-11
鼠（小説）	小島健三	12-19
たま虫を見る（小説）	井伏鱒二	20-24
角帽と労働者（小説）	山田清三郎	25-31
鴎（映画劇筋[注2]）――海の幻想曲――	藤田草之助	32-35
蝕つた幻影（戯曲、一幕）	岩淵甚四郎	36-40
大魔王（戯曲、一幕）	伊藤　忞	41-45
夢と財布（推薦小説）	浅井真代	46-49
文学又は文壇をすくふもの（評論）	林　政雄	50-53
『私小説』に就て（評論）	大月隆仗	54-56
涙（詩）　フヨードル、イワノウィッチ、テュチェフ（杉木喬訳）		57

【コント五篇】
瓦斯灯　北見勝二　58-59
痣　他一篇　中村由来人　59-60
運命　青木歓一[注3]　60-61
病む男の恋　島田磬也　61-62
女　小島君之助　62-63
野菊（詩）　栗山芳光　64-65
日輪は喘ぐ（映画劇筋[注4]）　駒形多郎　66-67
長詩〔福田正夫選〕　68-70
長詩九篇　森正雄等　68
短歌〔高梨直郎選〕　71-73
短歌百二十五首　川澄純一等　71
俳句〔中村浪平選〕　74
俳句五十七句　沢間青露等　74
応募小説選評　大月隆仗　75
詩選後に　福田生[注5]　75
俳句の選後に　中村浪平　76
風浪抄（短歌）――紀伊にて歌へる――　日比野道男　77
誌友通信　78-79
編輯後記　80

備考：『読売新聞』1925年12月28日発行第17529号第4面「よみうり抄」に「▲「文学界」発禁　新年号は風俗壊乱で発売禁止された」、また、『文芸時報』1926年1月5日発行第4号第7面「文壇消息」に「▲文学界　新年号は風俗壊乱で発売禁止となり」とあり、『早稲田文学』1926年2月1日発行第241号152頁「時事消息」にも「○「文学界」の発売禁止　聚芳閣発行の同誌新年号は風俗壊乱で発売を禁止された」とある。

注1、表1に「新年新進作家号」とある。

注2、目次には「(映画劇ストリー)」とある。

注3、目次には「青木観一」とある。

注4、目次には「(映画劇ストリイ)」とある。

注5、目次には「福田正夫」とある。